

「養取・養育」慣行を行うアフリカの親子・家族観

——北部ナイジェリア・ハウサ社会を事例に

梅津綾子

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程1年

報告者のテーマは「北部ナイジェリア、ムスリム・ハウサ社会の柔軟な家族や親子のあり方を、〈養取・養育〉という視点から明らかにする」ことである。本調査では、既に報告者と信頼関係があり、〈養取・養育〉の当事者でもあるインフォーマント I 氏を軸として、彼の友人・親族を訪れ、家族に関する様々な話を聞くことができた。調査期間は3月10日～3月31日（現地において行動可能な日数は18日間）の約3週間である。

今回の調査は、以下の3点において有意義であった。

① 2007年5月からの、1年間の長期現地調査の視察

報告者は、博士論文執筆に必要な不可欠な一次資料収集のための1年間に渡る現地長期調査を、2007年5月より行う予定である。本調査は、修士課程における初期調査からほぼ2年ぶりの報告者が、現地の状況を把握し、長期調査に対する態勢を整えるために重要なものであった。

② これまでのインフォーマント以外からの「養取・養育」情報

報告者のテーマである「養取・養育」に関する情報は、これまでナイジェリア北部のザリアにおける一部地域や特定の人物に限られていた。今回の調査では、同じくナイジェリア北部のソコトや、首都アブジャに住む人たちの「養取・養育」に関する知識・経験について聞き取ることができた。そのため、より実態に即した調査を行うための調査項目を再考する機会を得ることができた。

③ 家族・家庭のあり方

本調査では、重要なインフォーマント I 氏の親族を数軒訪問・滞在することができた。その際、I 氏との人間関係だけでなく、北部ナイジェリアにおける家族スタイルや家庭に対する考え方も伺い知ることができた。北部ナイジェリアの一般家庭・家族のあり方を知

ることは、「養取・養育」を多面的に把握する上で必要であることは言うまでもない。

次に、以上3点に関する、具体的な成果を記す。

① 2007年5月からの、1年間の長期現地調査の視察

当初報告者は、インフォーマント I 氏は、報告者がナイジェリアで本拠地としているザリアに核家族で居住していると、これまでのメールのやり取りから考えていた。そのため I 氏の家庭にホームステイしながら、ザリア近郊にありこれまで調査を行ってきた B 村に通うことで、I 氏一家と村の家庭の両方を同時に参与観察・聞き取りができると考えていた。

しかし本調査で、I 氏の妻子は故郷のダマドゥル（北東部ナイジェリアの都市マイドゥグリ付近）に長年住んでおり、ザリアに移住する予定はないことが分かった。また、まさに本調査の期間中に、首都アブジャにある I 氏の元職場から、戻ってくるようにと猛烈なオファーが来ていた。そのため I 氏自身が現在人生の岐路に立っており、ザリアに住み続けるのか、アブジャに移動するのかが不透明な状態であることが分かった。

一方村に関しては、再び村での調査を行うこと自体は歓迎されたが、以前間借りさせてもらっていた部屋が、家主が新たに結婚していた第3夫人の部屋となっており、そこにも住めないことが判明した。そのため村の調査と I 氏家に関する調査は分けて行うように調査計画を変更せざるをえないという課題と、報告者自身の居住地を新たに探さねばならないという課題が残った。

ただし同時に、③で詳細を述べるが、カノ、カドゥナ、アブジャといった、ナイジェリア各地に広がる I 氏の親族・友人に挨拶をすることができた。これにより今後の調査の足がかりとなる関係が築けたことは成果の一つとして考えられよう。

また、北部ナイジェリアの中心地であるカノ市においても参与観察を行いたいと考えていた。具体的にはカノに住むインフォーマント A 氏の親族で、娘を親族

の家に住まわせていた一家を対象にしようと考えていた。しかしその一家はジョスに移住していてもういないということが分かった（ただし親族の家に住んでいた娘はそのままカノに残っているという）。しかし調査の内容を伝えると、A氏はカノで「養取・養育」を行っている家庭をアレンジすると約束してくれた。

その他、1年間の調査時に所属する予定のソコトにあるウスマン・ダンフォディオ大学（以下UDU）の指導教官と学長に挨拶をしに行くと共に、②で詳細は述べるが、「養取・養育」に関する情報も聞くことができた。

② これまでのインフォーマント以外からの「養取・養育」情報

○VCとAjiさんからの「養取・養育」情報（3月19日）

ソコトに行った際に、UDUの学長（以下VC）の養取と養育の一般論と、その友人であり実際に「養子」であったAjiさんの経験談を少々聞くことができた。

〈養取と養育の違い〉

VCは養取（adoption）と養育（fostering）をはっきり区別していた。そしてその決定的な違いは「相続の有無」と「法律の関与の有無」であった。養取をするると養親から相続するが、養育の場合は実親からの相続となる。また養取の場合は登録が必要になるが、養育の場合はいらない。そして、「ハウサでは養取は稀だが、養育は一般的」という見解であった。それは先行研究と同じ内容で従来の欧米的な概念と同じものである。

しかし彼もまた、以前I氏が指摘していたように、「大人になったら、生みの親の家に住むか fostering parents の家に住むかは、子どもが決められる」「子どもにとって、第一の家は fostering parents の家で、次が彼ら自身の親の家」「子どもを小学校にやるときに、親の名前を書くが、fostering をした場合でも、『この子たちは私の子で、この子は違う』とは言わずに、自分（fostering father）の苗字で登録する。子どもが大人になったら、苗字はどちらでも選べる」と話していた。「養子」経験のあるAjiさんもこれに加えて、「（子どもが成長してから名前を）元に戻すと、fostering parent を拒否することになるからしない」「イスラムでは fostering の場合は生みの親の名前をもらうことになっているが、小学校とかの登録では fostering parent の名前を使っている」と話していた。以上によ

り、ハウサの「養育」は欧米的な「養育」とは異なる、柔軟な概念であることをより確信できた。

○アブジャでAdoさん宅に滞在（3月16-17, 22-29日）

詳細は③で記すが、I氏の「弟」であるAdoさんの家に滞在中、隣人の女性から少し話を聞くことができた。また詳細は聞けなかったが、Adoさんの同僚で、Adoさん宅を訪問していた男性も、養取をしていると話していた。

〈親族間の「養取」と友人間の「養取」〉

隣人の女性は、「養取は親族同士で、親が死んだ場合にするのはコモン」だと話していた。しかし、「ベストフレンド同士で親が死んでいない養取はコモンではない」と話していた。傍にいたAdoさんの妻Zさんも同意していた。

③家族・家庭のあり方

○カノでI氏の妹、Fさん宅に滞在（3月13-14, 29日） 〈家庭の運営の仕方〉

I氏の実妹Fさんはカノの銀行に勤務し、法律関連の仕事をしている。勿論I氏と同様、ムスリムである。夫は軍人で、ジョスに単身赴任をしている。子どもは小学生の娘と息子が一人ずつ、幼稚園に通う娘が1人いて、カノの自宅で生活している。彼女の家には他に少なくとも、彼女自身の「妹」（実妹ではないと思われるが詳細は不明）たちである大学生が2人と、夫の弟である大学生が1人いた。ただ報告者が滞在していた時期は大学が休みの時期だったためにFさん宅に滞在していたそうで、普段はカノから遠く離れたマイドゥグリ大学に通っているという。他にお手伝いさんの女性が1人いた。他にも家庭教師や他の親族など、数人が出入りしていた。

○I氏の現状

〈家庭の運営の仕方〉

I氏自身の家庭もFさんの家と類似している。I氏の妻子は故郷の北東部ナイジェリア、ダマドゥルに定住し、妻は仕事を持っている。長女はカノの学校に通い、長男はダマドゥルの学校に通い、最近次男が生まれたばかりである。先述したように、I氏自身は職場が定まらず、ザリアにもアブジャにも一人で滞在している。そして今後、どちらに落ち着いたとしても、妻子は移住してくる予定はないという。何故なら妻が仕事を持っているからだという。I氏は老いて体調の良くない父親を見舞うためにも、月一回はダマドゥルに帰り、家族と会う、という生活を続けている。また子

どもの数に関しても、I氏は「家族計画を考えないといけない、ナイジェリアでは考えずに子どもを沢山増やすので良くない」と話していた。そんなI氏をAdoさんの妻Zさんは、「白人みたいだ」と話していた。

○アブジャでAdoさん宅に滞在(3月16-17, 22-29日)

I氏の「弟」(実弟ではない。I氏の祖母の姉妹の息子であるが、I氏の方が年上である)でアブジャに住むAdoさんは、ヘルスセンターの職員である。妻のZさん(23歳)は、現在は家事・育児を行っているが、試験の結果がよければ来年から大学生となる。Zさんが学校に通っていた時には、同郷の13歳位の女の子をお手伝いさんとして雇っていた(現在彼女は故郷に戻っているという)。子どもは3歳の息子と1歳半位の娘が1人ずついる。家族全員ムスリムである。

〈夫婦間の地位〉

Zさんは最終的には銀行で働きたいのだという。しかし同時に彼女は、「私は妻だから、夫がダメと言えばそれ以上やらない」と口にしていた。Zさんに言わせると、Zさんの行動範囲も夫により制限されているということだが、夫はそれには異論を唱える。しかし「妻が夫の下に位置する」という考え方はAdoさんにもあるようだ。Adoさんが「外国で2人目の妻を取りたい」と言ったのに対し、冗談で「それならZも2人目の夫をとればよい」という話をしたら、AdoさんはZさんに向かって「君の夫は私だけだ。君は私の下にいるのだ」と冗談半分、本気半分といった様子で話していた。

〈第二夫人と子ども〉

夫が第二夫人を取ることに対する、妻の思いが表れている話をZさんより聞くことができた。Zさんは、夫が第二夫人を取ると言う度に、それを拒否する姿勢を見せてきたが、それでももし夫が第二夫人を連れてきたら、「受け入れる」と言う。また結婚後妊娠するまでの7ヶ月間、子どもができないことに悩んでいたとも言っていた。子どもができないと、夫は第二夫人を取るからだ、とZさんは言っていた。加えて、近所に一人の夫に対して複数の妻がいる同郷出身の家庭があるが、Zさんは「(妻は)両方とも(私の)親族で、両方家にいる時はあまり訪問したくない」と話していた。

以上のように妻側、少なくともZさんは第二夫人を取ることを好んでいない。そこで男性側にも、なぜ複数の女性と結婚したいのかを聞いてみた。現在2人の妻を持ち、5年以内に4人にまで増やしたいと話して



アブジャのAdoさん一家との写真。偶然会い、同行した2人の日本人とともに(左から日本人男性Aさん、Adoさん、長男、Zさん、長女、報告者、日本人男性Kさん)



インフォーマントI氏と報告者

いたAdoさんの同僚の男性Pさんにその質問をすると、第一にイスラムでは妻を4人まで取ることが認められているから、第二に子どもが沢山(20~30人)欲しいからだ、と話していた。

〈産湯〉

報告者が2度目にAdoさん宅を訪れたちょうどその日に、先述した近所に住む同郷出身の家庭で子どもが生まれた。そのためZさんと共に訪問した際、赤ん坊を産湯に入れる過程を見せてもらった。ここではその過程を記述することは割愛するが、赤ん坊を産湯に入れているのは母親本人ではなく、親族の女性だった。そしてZさんの話では、その赤ん坊は5人目の子どもだが、母親は赤ん坊の洗い方を知らないのだ、ということだった。Zさん自身も、今回その赤ん坊を洗ったのが初めてだと話していた。

おわりに

報告者の目的は、現在の北部ナイジェリア、ハウサ社会の〈養取・養育〉の実態を明らかにすることである。しかしそのためには、子どもの数・子育てに対する考え方や、それに伴う一夫多妻への考え方、そして

親族間や民族・出身地のつながりといった、ベースとなる実態を踏まえることが重要であると、今回の調査において再認識した。今後調査をどのように進めていくのかという点においては課題が残るものの、今後とも、今回出会った人たちの生活を詳細に記述することで、家族や親子のあり方の実態を描いていきたい。